早稲田大学大学院社会科学研究科

博士学位申請論文審査要旨

申請学位名称	博士（学術）
申請者氏名	李 聖傑
専攻・研究指導	地球社会論専攻　日本研究・日本文化論研究指導
論文題目	川端康成の「魔界」に関する研究 A Study on the “Makai” of Kawabata Yasunari
論文副題	その生成を中心に Focusing on the Formation

早稲田大学大学院社会科学研究科

博士学位申請論文審査要旨

申請学位名称	博士（学術）
申請者氏名	李 聖傑
専攻・研究指導	地球社会論専攻　日本研究・日本文化論研究指導
論文題目	川端康成の「魔界」に関する研究 A Study on the “Makai” of Kawabata Yasunari
論文副題	その生成を中心に Focusing on the Formation

審査委員会設置期間　自　2013年3月2日
至　2013年7月18日

受理年月日　2013年3月2日

審査終了年月日　2013年7月18日

審査結果　合格

審査委員	所属	資格	氏名
主任審査員	社会科学総合学術院	教授	内藤　明
審査員	社会科学総合学術院	教授	島　善高
審査員	社会科学総合学術院	教授	笹原　宏之
審査員	教育・総合科学学術院	教授	千葉　俊二

博士（学術）学位申請論文審査要旨

李　　聖傑

川端康成の「魔界」に関する研究

―その生成を中心に―

１本論文の主題と方法

本論文は、川端康成のとくに戦後の文学をめぐって、川端自身がその作品中に使った「魔界」という語をひとつの手がかりとしてさまざまな角度から論じようとしたものである。「魔界」的なものの生成を川端と川端をめぐる戦中戦後のありようから解き明かし、さらにそれが展開していくさまをその小説作品を通して分析して、戦後の川端文学を総合的に論じようとしている。

川端の「魔界」は、一休禅師の言葉とされる「仏界易入魔界難入」による。この一節が一休その人のものであるかを疑う説もあるが、川端は一休のその書を所蔵しているといい、ノーベル賞の受賞講演においてもこの一節を引用しながら、西洋とは違う死生観、世界観、他界観、美意識を披瀝し、そこに日本ないし東洋の伝統を語って、自らのアイデンティティーとしている。川端の小説中にこの語がはじめて現れるのは 1950 年から 51 年にかけて新聞に連載された『舞姫』であり、その後いくたびか使われる。そして、とくに戦後の特異な川端の文学を考察する際、多くの論者によってこの語は言わばキーワードとして取りあげられてきた。また「魔」に関わる「魔族」「悪魔」「魔性」「魔もの」といった言葉も、川端のよく使うところである。しかし、仏教的な世界観と関わり合いつつ、一方で反道徳的な要素や退廃的な官能美とも関わる「魔界」を解明することはたいへんむずかしく、またそれは戦後の川端文学のわかりにくさや特異性とも繋がってくる大きな問題をはらんでいるといえる。

本博士学位申請者は、中国において川端文学に関心を抱き、武漢大学の修士論文においては、川端の自殺について考察した。本博士論文においては、自殺によって生を終わらせることになる川端が、戦争を境にどのような変化を遂げていったか、またそれが、「魔界」という言葉に象徴されるような世界とどのようにかかわり、「魔界」的なものがどのようにして作られていき、それが川端にとってどのような意味を持つかを、広い視野から論じようとしている。そのためにまず、申請者は、日中戦争、太平洋戦争下の川端の体験を、川端の旧満州紀行、特攻基地体験などを調査することで明らかにしてその重要性を指摘し、また友人の死や、戦前から交流のあった作家の死や死生観などをとおして「末期の眼」をとらえ、さらに戦後の占領下における日本の状況を検閲などとも関わりながら分析する。文献の精緻な調査を通して、従来の研究の見落としていた部分や日本の研究者とは異なった視点を提示しようとしている。次に、「反橋」三部作、『舞姫』、『山の音』、『千羽鶴』、さらに『みづうみ』といった作品を、その成立過程にも触れながら論じる。川端のテキスト

を読解、分析しながら、作品論、作家論の両面から、川端文学における「魔界」の生成とその展開の様相を明らかにしようとしている。そしてそれを踏まえて、川端文学における「魔界」の意味を論じようとする。論を進めるにあたっては、先行の論を渉猟しつつ、川端自身によって書かれた小説、随筆等はもとより、旧満州における新聞記事、占領資料としてのプランゲ文庫、全集未収録の文献などを駆使して、新たな発見と着想を試みようとしている。大きな構想のもとに、日本と東アジアの戦中・戦後の歴史と社会を視野に入れながら、川端における「魔界」の生成と展開を明らかにしようとしたものといえる。

2 本論文の構成

本論文の構成は以下の目次の通りである。

目次

序章　川端康成研究史と本論の視座
1　はじめに…… 1
2　日本における川端康成研究…… 2
2－1　作品研究…… 2
2－2　作家（伝記）研究…… 5
2－3　書誌研究…… 8
3　中国における川端康成研究……9
3－1　中国における川端文学（及び近代日本文学）の翻訳…… 9
3－2　中国における川端文学の研究……12
3－3　川端と中国作家に関する比較研究……14
4　「魔界」研究史と本論の視座……17
4－1　いま，なぜ「魔界」なのか……17
4－2　「仏界易入魔界難入」について……20
4－3　「魔界」の研究史……21
4－4　本論の視座……28

第一部　「魔界」の源泉

第一章　川端康成における戦争体験について
—「敗戦のころ」を手がかりに—
1　はじめに…… 31
2　旧満州紀行についての考察…… 33
2－1　春の旅をめぐって…… 33
2－2　秋の旅について…… 41
2－3　「敗戦のころ」に村松梢風，火野葦平を書き漏らしたことについて…… 49

3　特攻隊基地の報道班員の体験について…… 51
3－1　「生命の樹」について……52
3－2　新田潤と山岡荘八における特攻隊の記憶……54
3－3　杉山幸照における川端康成の思い出について……56
3－4　高戸顕隆における川端康成の回想について……58
4　おわりに…… 63
第二章　敗戦時における川端康成
―友人の死去，日本（古典）回帰，「末期の眼」の徹底化―
1　はじめに…… 66
2　敗戦と友人の死去…… 67
3　日本（古典）回帰…… 75
3－1　「実験」／「伝統」―新感覚派から古典回帰へ…… 75
3－2　川端における『源氏物語』の受容…… 80
4　「末期の眼」の認識について…… …86
4－1　川端から見る竹久夢二の「末期」……87
4－2　川端からみる芥川龍之介の「末期」……90
4－2－1　川端の「芥川氏の死」について…… 90
4－2－2「或旧友へ送る手記」は芥川の死の汚点であるか…… …92
4－3　川端からみる古賀春江の「末期」……94
4－3－1 川端と古賀春江の共通な宗教観と親交について……94
4－3－2 川端における古賀春江の「末期の眼」の認識について……97
5　芥川龍之介における「末期の眼」の認識と関東大震災…… ……98
6　川端康成における「末期の眼」について……102
7　おわりに……104
第三章　川端康成における「戦後」
―占領期の検閲と戦後の社会活動を中心に―
1　はじめに……107
2　川端と占領期の検閲―刻印された「戦後の世相」の痕跡……108
2－1　削除された「過去」と検閲について…… …108
2－2　作者による「過去」の削除について…… ……113
2－3　「結婚と道徳について：座談会」と「生命の樹」の検閲について… ……116
2－4　占領軍の検閲への配慮による「舞姫」の改稿について……120
3　戦後の生―世界平和の願いへの歩み…… 124
3－1　川端にとっての日中戦争―「英霊の遺文」を中心に……124
3－2　川端にとって東京裁判はどのような存在だったのか…… ……129
3－3　川端にとっての「ヒロシマ・ナガサキ」

―日本ペンクラブの活動の一環としての原爆被災地の視察 ……133
4　おわりに……138

第二部　「魔界」の誕生

第四章　胎動期としての「反橋」三部作
―「女の手」、「再会」にも触れて―
1　はじめに……140
2　「女の手」と「再会」について……141
2－1　瞬時の忘却／永遠の記憶―戦争の影…… 141
2－2　「過去」との「再会」―戦後の世相……145
3　「反橋」三部作について……150
3－1　「反橋」連作の名称について……150
3－2　「あなた」について…… ……152
3－3　「反橋」について ……155
3－4　「しぐれ」について…… ……160
3－5　「住吉」について……166
3－6　「反橋」三部作における「魔界」……174
4　おわりに……178
第五章　『舞姫』における「魔」の様相について
―占領，舞踊，そして「魔界」―
1　はじめに……181
2　『舞姫』における時代状況的側面……182
2－1　敗戦の影…… 182
2－2　戦後の世相…… ……185
2－2－1　占領による「無力感」……185
2－2－2　家族主義の崩壊―日本の伝統の喪失……188
3　『舞姫』における内面的側面……190
3－1　「不安」「恐怖」を表象とする煩悩……190
3－2　性と愛の葛藤を内実とする煩悩…… 191
3－3　「山の音」における山を鳴らす「魔」との関わり…… 194
4　舞踊における「魔」……195
4－1　舞踊の「魔力」について……195
4－2　三人の舞踊家と三人の「舞姫」について……196
4－3　三人の「舞姫」のバレエについて……199
4－3－1　バレエを扱うことについて……199

4－3－2　「肉体」と「精神」が乖離した「舞姫」のバレエ……201
5　「魔界」の登場……202
5－1　松坂の登場について…… 202
5－2　『舞姫』における「魔界」……204
6　おわりに……206

第三部　「魔界」の展開

第六章　『千羽鶴』における「魔界」の諸相
—「内魔」の生成と深化を中心に—
1　はじめに……208
2　「内魔」の生成について……209
2－1　「悪魔」の血をもつ「あざ」と「不潔」……210
2－2　「鼠」,「桃の花」の象徴性について……213
3　「内魔」の深化について……216
3－1　性の深淵と不倫の罪意識—菊治と太田夫人……216
3－2　鎮魂と「解毒」—菊治と文子…… 220
4　救済としてのゆき子について……224
5　茶室による異界の構築……229
6　おわりに……232
第七章　『山の音』における「魔界」思想の位相
—戦争の影，戦後の世相，そして異界の構築—
1　はじめに……234
2　『山の音』における時代状況的側面……235
2－1　戦争の影について…… …236
2－2　戦後の世相について…… 239
3　『山の音』における内面的側面……242
3－1　「山の音」と老いの自覚……242
3－2　保子の姉の形代としての菊子…… 247
4　「夢」による異界の構築……252
5　『山の音』における「魔界」……258
6　おわりに……261

第四部　「魔界」の爛熟

第八章　『みづうみ』における「魔界」と戦争の関わり

―主人公銀平を視座として―
1　はじめに……263
2　「みづうみ」の構成と削除について……264
3　『みづうみ』における「銀平＝川端分身」説について……271
4　『みづうみ』における銀平の魔性と戦争……272
4－1　少年時の銀平の異常な行動……272
4－2　『みづうみ』における「戦争」の影……274
4－3　『みづうみ』に見られる「敗戦」と「戦後」……277
5　おわりに……283
第九章　『みづうみ』における女性像と「魔界」
―魔性の原点へ―
1　はじめに……286
2　『みづうみ』における女性像……287
2－1　久子について……288
2－2　宮子について……293
2－2－1　「ハンド・バツグ事件」について……293
2－2－2　宮子における母性と「魔性」をめぐって……298
2－3　町枝について……303
2－4　「湯女」について……307
3　魔性の原点へ……312
3－1　「後をつける」という「魔」的行動……312
3－2　「みにくい足」の美女追跡―「天の摂理」……313
3－3　「血」の呪縛……315
4　『みづうみ』における「魔界」について……317
5　おわりに……321

終章　「魔界」の生成と射程
1　「魔界」の生成……325
1－1　第一部について……325
1－2　第二部について……328
1－3　第三部について……331
1－4　第四部について……333
1－5　「魔界」の内包するもの……336
2　「魔界」の射程―近現代日本文学との関連―……341

【各章の注】……344

【参考文献】
単行本……367
雑誌特集……371
論文・新聞記事ほか……372

【資料編】
一　中国における川端康成の翻訳リスト……375
二　中国における川端康成の研究書（単行本）リスト……379
三　「魔界」研究文献目録……381
四　川端康成の年譜……386
【関連論文初出一覧】……413

３論文の概略

以上のように、本論文は、「序章」を巻頭に置き、一～四部九章、そして「終章」と、計十一章によって構成されている。それぞれの章の概略は以下の通りである。

序章　川端康成研究史と本論の視座

ここでは、研究史として、川端の作品論、作家論のおおよそをたどり、また中国における川端文学の翻訳や研究史、また川端と中国作家の比較研究を鳥瞰する。また、川端の「魔界」論、「魔界」作品論を精緻にたどり、現在「魔界」について考えることの意義を申請者の立場から述べようとしている。とくに、戦後の川端の変貌をとらえ、戦争と敗戦体験、戦後の状況が川端に大きな影響を与えたのではないか、また魔界の内包するものを深めようとするところに申請者の問題意識があることが記されている。

第一章　川端康成における戦争体験について　―「敗戦のころ」を手がかりに―

「魔界の源泉」と題された第一部のこの章では、「敗戦のころ」（1955 年 8 月『新潮』）を手がかりにして、川端の旧満州旅行を『満州日日新聞』と、川端の文章、及び秀子夫人の文章、川端の書簡などからたどり、川端の戦争観について分析する。旧満州での足跡を明らかにしているところには新たな発見があり、また戦中の川端の戦争への態度を「弱肯定」と分析する。また、報道班員として赴いた特攻基地での体験を川端や周囲の人々の文章から浮き彫りにし、戦後作品「生命の樹」との関わりを論じる。戦争に対する戦中の川端の立場を、讃美でも批判でもないものとしつつ、戦争が川端の精神に深い傷痕を残し、それが戦後の川端のありようと深く関わっていたことを示唆する。

第二章　敗戦時における川端　―友人の死去，日本（古典）回帰，「末期の眼」の徹底化―

ここでは、川端が敗戦と前後する友人たちの死から、大きな打撃を受け、そのさびしさ、

孤独感、老いの自覚が、敗戦のショックとともに、川端に日本（古典）回帰を促し、それをあからさまに宣言させるようになったという。またそれに先立ち、1938 年～39 年に刊行された『川端康成選集』ころから川端は日本の伝統的なものを意識し始めるが、『源氏物語』などへの傾倒が明確に語られるのは、「満州国の文学」(『芸文』1944 年 7 月)あたりからではないかと指摘する。そこに戦争の影を申請者は見るが、さらにまた、昭和初期、関東大震災にまで遡り、「末期の眼」の認識を、竹久夢二、古賀春江、芥川龍之介などの分析により行い、そのような死へのまなざしが敗戦前後に再び甦り、「魔界」を呼び込む契機となったのではないかと論じる。

第三章　川端康成における「戦後」―占領期の検閲と戦後の社会活動を中心に―

ここでは、占領軍によって検閲を受けた三つの文章「過去」「結婚と道徳について：座談会」「生命の樹」の削除部分をめぐり、検閲資料（プランゲ文庫による）を用いて分析する。また、また検閲への配慮によって『舞姫』の一部が書き直されたこと、単行本『再婚者』に川端が「過去」を全文削除した意味などを考察する。先行論文により一部指摘されていた部分もあるが、詳しく全体を論じて意義深いものとなっている。また、東京裁判の傍聴記である「東京裁判の老人達」や、広島、長崎を訪れた体験の中から生まれた文章などを通して、戦争と戦後日本を川端がどのように見ていたかを論じる。以上の四章は、「魔界」が生成する歴史的状況とそこにおける川端の精神のありようを、さまざまな資料によりとらえ直そうとするものである。

第四章　胎動期としての「反橋」三部作　―「女の手」、「再会」にも触れて―

ここから「『魔界』の誕生」と題された第二部に入る。まず、戦後間もなく発表された「女の手」「再会」の作品分析をとおして、戦後の川端の出発点、また戦後の世相がどのように作品に現れているかを分析する。また「反橋」三部作を分析し、「橋」の境界性に注目し、また「魔界」という言葉こそ出て来ないが、「悪魔」「魔除け」などの言葉が散見されることを指摘し、魔の救済のために日本の古典が求められていることを述べる。「魔界」系譜の作品の準備段階として、これらの作をとらえる見方を提示している。

第五章　『舞姫』における「魔」の様相について　―占領，舞踊，そして「魔界」―

ここでは、「魔界」の語がはじめて語られる『舞姫』を分析する。まず、この作品には、多くの戦後の時代状況が書かれていることを見、価値体系が戦前・戦中・戦後で大きく変化する中で、それと折り合いをつけつつ、またそれとぶつかり合い、悩みを抱えていく人物像をとらえる。また主人公波子をとおして、「舞踏」が持つ「魔」の要素を分析する。舞踊論をも取り込みながら、肉体と精神のありようを論じる。それらを踏まえながら、『舞姫』の「魔」には、時代状況としての「外魔」、煩悩としての「内魔」、芸術における「魔」の三つがあることをいい、煩悩を超越して精神の迷いがなくなる境地に達し、芸術的世界を

目指すことが求められている、という。

第六章　『千羽鶴』における「魔界」の諸相　―「内魔」の生成と深化を中心に―

『千羽鶴』は『舞姫』より一足早く、1949 年 5 月から新聞連載がはじまる。単行本化されるが、未完の作ともいえる。川端はここでは、近親相姦的な男女関係を描くが、不倫の悔恨と罪の意識に苛まれながら、魔性に惹かれていく人間の姿に、申請者は、「内魔」の生成とその深化を見ていく。そして、男女の複雑な関係の中での、それぞれの心理やその背後にあるものを追って、「魔性」にとらえられていく男女のありようを浮き彫りにする。またここでは、茶室が効果的に使われていることに着目し、そこが異界を構築していることを指摘して、それがこの小説において現実の倫理の規範をこえる空間をなしていることを考察している。

第七章　『山の音』における「魔界」思想の位相

―戦争の影，戦後の世相，そして異界の構築―

『山の音』は川端の代表作の一つだが、申請者は、この作品に内在する戦争の影、戦後の世相、夢による異界の構築などを取りあげ、それを「魔」に繋がる要素としてとらえる。また内面的要素としての、老いの自覚、屈折した愛、性の煩悩などをとらえ、本文の分析、シンボルや夢の解明、形代論などをとおして、それらがどのように絡み合って作品を形成しているかを論じる。申請者は、山を鳴らす「魔」について、それは死期の告知のシンボルであり、死に対する恐怖と性に対する不安の音であるが、逆に生に対する希求の音でもあるといい、また現実世界では倫理の規範があってできないことも、夢の中では解放され許されるという主人公信吾の深層意識を考察する。『舞姫』『千羽鶴』『山の音』はほぼ同時期に書かれるが、『舞姫』に語られることになる「魔界」がどのように示されていくかを『千羽鶴』『山の音』から分析し、作者のとらえた魔界思想を展開している。

第八章　『みづうみ』における「魔界」と戦争の関わり

第九章　『みづうみ』における女性像と「魔界」

ここから、本論第四部「『魔界』の爛熟」に入る。『みづうみ』は 1954 年に連載されたが、初出誌と単行本の間には多くの異同があり、大幅な加筆、削除、訂正が見られる。また小説の展開と現実の時間の経過は一致せず、内容的にも女性を追跡するという異常な心理・行動が出てきて、読者を当惑せしめる。しかし、「魔性」「魔力」「魔族」「魔界の住人」「魔もの」「悪魔」といった言葉が使われ、「魔界」をとらえ、その爛熟を見る好テキストとなっている。まず第八章では、主人公桃井銀平をめぐり、その魔界と戦争との関わりが考察されている。初出本文から単行本への改変、また全体の構造をとらえつつ、その出生、コンプレックスである足の醜さ、戦争体験、それらを解消しようとしての美への追究が、銀平に異常な行動を促す宿命的なものとしてとらえられ、それが敗戦後の日本の状況の中に

映し出されていることを、テキストに沿いながら細かく分析する。また九章では、登場する 4 人の女性のありようをそれぞれ分析して、そこに主人公の母性への希求や救済への思いを認め、その母体回帰は故郷の「みづうみ」に象徴されているという。故郷は、主人公銀平にとって父の変死した屈辱的な場であるが、同時に美しい母を象徴するものであり、怨恨と渇望という二律背反を共存させようとする心理が、「魔界」のメカニズムであるともいう。また救済として美や女性が配されているところには、デカダンスに生きる人々を脱出・浄化させたいという川端の意図がうかがえるともする。いずれにしろ、魔性の原点としての血が、戦中・戦後の苦悩をとおして現れたのが、銀平の魔的行為であるとし、『みづうみ』における「魔界」の持つ意味、そしてその当時川端がこの作品をとおして求めたものを考察しようとしている。

終章　「魔界」の生成と射程

ここでは、以上の調査、読解、分析を総括し、魔界の源泉、誕生、爛熟を確認する。申請者は、川端の内部に培われていた言わば末期の眼が、悲惨な戦争や敗戦にともなう戦後の社会と精神の混乱の中で蘇り、「魔界」的な世界と思想を生成、展開させたとする。川端文学には美があってモラルがないといわれる。ときに背徳や退廃的とされる官能美が描かれるが、申請者によれば、戦後の川端には、人間の心の闇や悪や欲望を見つめ、その煩悩を見つめた後に救いが生まれ、美の正体が見つめられるとする思想があり、それは「魔界」的な世界として展開しているものの中に語られているという。『舞姫』『山の音』においては倫理的抑制が崩れ、『千羽鶴』においては深層意識の欲望があからさまに露呈しているが、物語は勧善懲悪を説くのではなく、人間の煩悩とその苦悩の深さを語るものであるとし、あえて川端はそのような世界を構築したのだとする。そして『みづうみ』においては、魔界の住人である人物を主人公として美意識が道徳や倫理を踏み倒しており、その徹底化がなされているとする。

その上で、川端文学の魔界の生成を促したものには戦争の影・戦後の世相という外部的な「外魔」と、不安・煩悩としての「内魔」があり、その魔の正体をよく認識することで、生命力の根源を呼び起こし、人間の本性に戻ることができるという思想がそこにみられるとする。そして「仏界」と「魔界」は一つのものの両面であって対立するものではないとし、ともに真の救済の境地へ至るものとする。しかし、あやうさや困難さもそこにあるのであり、美への耽溺の末、救われず、滅びの予想される世界を描く川端の世界は、人間の本質を煩悩の相に見る思想があるともいえ、「魔界」を徹底的に凝視することに芸術家のあるべき姿を見ようとする川端の姿があるともする。

『みづうみ』以降、「眠れる美女」「美しさと哀しみと」「片腕」さらに、「たんぽぽ」「隅田川」といった、エロティシズム、フェティシズム、没道徳といった内容が一段と深化していく小説が書かれる。申請者は、それらでは、表層のものと、母体回帰と生の根源を希求する深層のものとの両義性や葛藤が見られるが、これらの世界の分析や、自死による終

焉については、今後の課題としたといい、また「魔界」と、川端以外の近代日本文学の関連、また、「魔界」と中国文学・思想との関係などについても、さらに研究課題として考察していきたいとして論を閉じる。

なお、末尾には、【資料編】が付せられている。「一　中国における川端康成の翻訳リスト」は、1980 年以降に、中国で刊行された主要な川端文学の翻訳を調査したもの、「二　中国における川端康成の研究書（単行本）リスト」は近年の中国における川端研究の主要著書のリストであり、中国における川端研究の現在を大観することができる。「三　『魔界』研究文献目録」は、川端における「魔界」「魔」に関わる研究を広く渉猟したものであり本研究の基礎付けとなるものであり、「四　川端康成年譜」は近年の研究もふくめて本研究を時系列として鳥瞰する一助となる。

４公聴会における質疑応答及び審査委員からの意見などの概略

2013 年 6 月 20 日に公聴会を開いた。概略は以下の通り。

(1)　テーマ設定について

「魔界」から戦後の川端作品を読み解くのは、必ずしも新しい見方ではなく、新鮮さに欠けるところもあるが、一、二章でその生成に川端の戦争体験をおいているところと、全集未収録の文章を用いて、大震災とも関わる末期の眼を置いているところは論者ならではの新たな見方といえる。とくに、川端の旧満州旅行の足跡を資料にあたってとらえ、そこにおける川端の態度に注視しているところは新鮮である。特攻基地での体験なども踏まえ、戦争・敗戦が川端に与えた影響を大きくとらえているところは、日本の研究者の見方を相対化するような視点を持っており、意義深いものとなっている。三章で戦後の占領下の状況が川端にもたらしたものを、検閲資料などにあたり細かく分析しているところも、すでに部分的な指摘はなされているものの、川端論に積極的に取り入れて論じており評価できる。

(2)　作品論をめぐって

川端の文章は、日本人であってもとらえどころのない部分があり、その構成がわかりにくい。申請者は外国語としてそれにあたっているので困難もあるが、努力のあとがよく見られ、作品論として評価できるものとなっている。ただ、作品の読みにおいては、さらに独自の読みを深める必要がある。たとえば作品中に出てくる「桃」や「イチゴ」を語るのに、『イメージシンボル辞典』を用いているが、自分でその語に関する資料を収集し、自分なりの読みを提示していく必要があるだろう。その際、中国における「桃」のイメージの多様性や変遷など、申請者が独自に探索し得るものもあるはずである。作品の読み方は論者によって多様であり、決定的に確定、論証できるものではないので、別の読解もあり得

るだろう。表層的な読みに留まらず、さまざまな可能性を広げていく必要があろう。文章も論理的で日本語としてしっかりしているが、さらなる凝縮力も欲しい。

(3)　舞踊と魔について

川端の「遺産と魔」という小文に注目したことは評価できるが、舞踊についての関心はさらに深めることが可能ではないか。踊り子への執着は、『雪国』にも見られるところで、『伊豆の踊子』から浅草への関心など、川端に一貫するものともいえる。踊り子がバレリーナであり、日本の伝統舞踊とバレエとの相違に着目しているところは新しいが、肉体によって表現し刹那に消えてしまう舞踊とそれを表記し記録する文学といった問題は、今一つ深く考えられていい、という指摘がなされた。

(4)「仏界易入魔界難入」をめぐって

「仏界易入魔界難入」は一休の言葉として間違い無いか、という質疑があり、申請者は、川端自身、それを一休の言葉として語り、自筆の書を持っていると記している。しかし本論にも詳しく述べたように、それを疑う論もある。はっきりと確定はできないが、川端自身、一休のものとしてそれを信じていたのではないかということで論は進めている。ただ、一休自身の言葉でなくても、あり得る章句であり、川端の認識に変わりはなく、本論の展開上も問題はないと考える、と応答した。

(5)「煩悩」、また「外魔」と「内魔」をめぐって

論中に「煩悩」という言葉が再三使われるが、「煩悩」とは何か、それをどうとらえるかといった追求が不足しているのではないか。また別の書で一休のものかともいう、「向魔如何降」も意味を正確にとらえなおして、考察する必要があるのではないか。また、川端は仏教にどれくらいの関心があったのか。仏教といっても禅宗と浄土宗とは大きな違いがある。辞典などを使うときにも、そういった仏教内部の相違をわきまえてから使うべきであるとの指摘がなされた。それに対して申請者は、川端の仏教への関心は強いものであったが、その理解度や宗教としてのありようは、不明なところも多く、今後さらに詳しく検討していきたいとの応答があった。

また、「外魔」と「内魔」が言われているが、これは川端が意識したものか、という指摘があり、申請者は、これは作品を読解しようとする中でのものであり、川端がそういう言葉で二つの「魔」を理解していたというわけではないとの応答があった。

(6) 魔界的作品のその後の展開について

本論は、「その生成を中心に」と副題がなされ、『みづうみ』までを主なる対象としているが、その後の「眠れる美女」や「片腕」などは、さらに退廃的で官能的な世界や倒錯的な世界が描かれている。申請者の作品理解は、やや前向きで倫理的な見方を示しているが、

「魔界」的世界はさらにどろどろしたものをもっているのではないか。また川端の自死を申請者はどうとらえるか、という質問があった。

それに対して申請者は、今回は「魔界」的とされる作品が生まれ展開していくさまを、戦中・戦後の中にみようとしたものである。ノーベル賞の受賞講演の中では、理想的なものや祈りが美しく語られているが、そこにも老いや葛藤があったであろう。作品として何が語られ、目指されていたか、『みづうみ』後の展開については今後の課題として考えていきたいと応答した。また川端の自死について申請者は、偶然の事故死との説もあるが、何らかの意志が働いていたことが認められるとし、その要因については、従来の諸説をあげたが、真相は不明というしかないとした。川端自身が言うように、西洋人とは異なった東洋人の死に対する意識がそこあるかも知れないが、川端の死生観、他界観なども含めて、さらに考察していきたいとの応答があった。

５全体的な評価

（１）主題の設定

川端文学については、内外においてさまざまな角度から多くの論が重ねられてきている。ノーベル賞作家ということもあり、申請者の母国である中国においても、翻訳がなされ、研究もさかんに行われてきた。しかし川端文学の評価はさまざまである。一方で日本の伝統を継承した美的世界の探求者という評価があり、一方で退廃的な世界や愛欲の世界を描き自死に至る特異な作者というとらえ方もあり、その文章も日本語の粋を集めたものであるという見方がある一方、その文章や構成のわかりにくさを指摘する声もある。川端の中には、一貫するものと時代とともに変化するものがあり、またその享受においても、時代や享受層の影響を強く受ける可能性がある。しかし、文学というジャンルの危機がいわれ、グローバリズムの中で固有の文化といったものが見えがたくなり、また文明の発達や価値の相対化により従来の人間や世界の輪郭が崩れている現在、西欧の文学や文化に強く影響されながら独自の文学世界の構築をなした川端の文学は、再評価されるべき要素をもっており、その兆候も見えはじめている。

こういった中で、申請者は、戦後川端文学を大きくとらえていくことを試みようとしている。そこで選ばれたのが「魔界」という語である。一休禅師の言葉として、『舞姫』の中にはじめて使われた「魔界」は、その後小説などにいくたびか使われるが、ノーベル賞の受賞講演の中で使われたこともあって、戦後川端文学の特色の一つをあらわすものとして語られる。しかし、その内包するものについては、さまざまなとらえ方があり、検討の余地を残している。また中国や日本の一部においては、『雪国』や『伊豆の踊子』などの戦前の作が川端の代表作とされ、戦後の川端文学は、必ずしも馴染み深いものとはなっていない。あるいは忌避されることもある。こういった中で、申請者は、あえて「魔界」という語にこだわることで、戦後の川端の文学をとらえる方向性を見出し、捉え直そうとしてい

る。「川端康成の『魔界』に関する研究―その生成を中心として」というテーマは、川端文学が現在置かれている位置を大きな地点から捉え直そうとする好設定であり、また申請者の立場や問題意識を掘り起こし、川端を論じていくのに適切なものである。このテーマを得ることで、本論文は、申請者の独自性を発揮することができたといってよい。

（２）本論文の方法と論の構成・展開

本論は、序章で問題意識を提示した後、「魔界の源泉」「魔界の誕生」「魔界の展開」「魔界の爛熟」の四部の構成をもち、終章で総括する。「魔界の源泉」は、戦後「魔界」が使われるまでの、言わば魔界を生み出す地下水脈とその噴き出す要因をとらえようとするものである。ここでは、小説ではなく、川端と川端をめぐるさまざまな資料をとおして「魔界の源泉」が探求考察されるが、その一つは戦争であり、今一つは関東大震災にも遡る末期の眼であり、今一つは敗戦後の状況である。川端は時代から超越した芸術派とみられがちだが、申請者は川端の旧満州体験と特攻基地体験を詳しくとらえることで、「魔界」と戦争を結び付けようとする。川端の旧満州紀行体験が緻密に調べられ、それ自体一つの意義を持つが、戦中から戦後への川端の戦争への意識の変化を見つつ、それらからとらえられた戦争へのまなざしを川端の戦後や魔界と繋げていくところに、本論の独創性があるといっていい。また、「末期の眼」については、全集未収録の資料をも使いながら、川端の根元的な世界観、死生観を指摘してこれもユニークなものとなっており、以後も継承される川端の世界観を示唆する重要な視点となっている。また、戦後の占領下の川端や文学者の置かれていた状況や意識を、検閲資料なども用いながら復元しようとしており、これも戦後の川端文学を考える際に、今日重要な視点たり得る。このようなものの混合の中に、『舞姫』においてはじめて「魔界」の語が出て来るというのが申請者の主張といえる。こういった視点は、ややもすると日本の読者や研究者とは距離を持ったものにも思えるが、そこに申請者の独自性があり、先行研究を渉猟したうえでの緻密な調査が、その見方の有効性を証しているといえる。

これを土台に、「魔界の誕生」「魔界の展開」「魔界の爛熟」は、「反橋」三部作、『舞姫』『千羽鶴』『山の音』『みづうみ』の作品論として展開され、そこにおいて「魔界」も語られる。この構成は当を得たものであるといっていい。川端の小説は構成や輪郭がおぼろで、未完のものも多く、文章も難解でそれを充分論じ尽くすことはむずかしい。申請者の読みは、ときに裏に流れているかもしれない逆説や皮肉を見過ごしているのではないかと思われる部分もあるが、おおむね作品の流れとそこに盛りこまれた諸様相をとらえ、作品論として妥当なものとなっている。また、川端の時代観、死生観、人間観、芸術観を抽出して、その中に「魔界」の生まれ出てくる様相を掘り出しており、戦後十年の川端の意識が跡づけられている。テキスト論が隆盛の中で、作品から作者のありようを抽出するのはいささか古めかしい感もあるが、それが逆に本論ではある新鮮さをもっているといえる。また、こういった過程をとおして、「終章」において川端が「魔界」とされるものをどのようにと

らえていたかを考察する。申請者は、「内魔」と「外魔」を想定することで、内部と外部、心身と時代環境との相克の内に、希求され、解脱されていくものとして「魔界」をとらえ、それは「仏界」と対立するものではないことをいう。「魔界」自体については、必ずしも多くの用例があるわけではないので､川端の意識を総体的にとらえることはむずかしいが、申請者は自分なりの魔界観を提示することで、戦争の後に築かれた戦後の川端文学の一特色をとらえようとしたといえ、高く評価できよう。また、副次的な文章を参照することなどにより、従来あまり指摘されてこなかった見方を提出しており、論として意義あるものとなっている。

（3）先行研究のサーベイと独自性について

申請者は、序章に研究史の展望をおき、資料編の文献と合わせて、当課題における先行の論を広く渉猟しており、その上に論が展開されている。本文中においては先行論の紹介的な解説もあるが、従来の見方に疑問を呈してユニークさが発揮されている部分が多々みられ、それは時に虚無的・退廃的なものより倫理的・向日的なものを指向する場合もあるが、川端研究に一つの刺激と問題提出をするものといえる。申請者は日本の学会において論文の発表や研究発表を多く行っており、外国人研究者の独自性ということによることなく、日本の学会に益する活動を行っている。また一方、中国における研究史にも通じており、比較研究的な視野をももつことにより、研究の厚みや独自性を持つことを可能としている。本論文は全体を通して、戦争を経て作られた戦後川端文学の特質のある部分を浮き彫りにしており、独自性をもったものとなっている。またそれは、狭隘な文学研究や思想研究にとらわれることなく、時代を復元する中でテキストを読解して、広く東アジアの時代社会の中に作者と作品を位置づけており、社会科学研究科の博士（学術）論文としての意義をもっているといえる。

（4）今後の課題

今回の論文は「その生成を中心に」と副題があるように、戦後十年の作品を中心に「魔界」が論じられている。しかし、申請者も論中に述べているように、さらに自死までの時期に書かれた、より退廃的、官能的ともいえる「魔界」的な作がある。そのような作をも視野に入れることにより、「魔界」とされるものやそれへの意味づけに発展が生じることもあり得るし、自死に至るまでの川端文学についての新たな視野が開ける可能性もあるだろう。また、一休に依拠するかどうかはともかく、「魔界」が「仏界」と並べられている以上、仏教との関わりが密であることは言うまでもない。仏教の教理や思想を理解することは容易ではないが、それを避けて通ることはできないので、仏教的な（それも宗派によって千差万別である）またさらに東洋的な死生観についての深い理解が求められよう。また、魔界というキーワードで作品を追っているが、言うまでもなくそれぞれの作品にはそれぞれの価値と独自性があり、そこへの注視も必要であろう。またさらに言えば、現代に直面す

る人間の課題をもとおした、新たな川端像も求められるであろうし、申請者が終章で述べているような、空間的、時間的な、さらなる比較研究も必要とされよう。

5 総合的判断

こういった残された課題があるが、それをなすには多くの時間と、また多くの紙幅を必要とし、また日本と世界、人間と文化についてのさらに広い知識と考察が求められよう。本論文は、戦後十年の川端が中心となっているが、あえて「魔界」という語にこだわることで、戦後の川端の文学をとらえる方向性を見出そうとしており、とくに戦争体験や戦後の状況、また本源的な末期の眼への遡行などが「魔界」の生成に関わっているという独自の視点を提示し、それを実証的かつ緻密に論じている。またその上に川端作品を丁寧に分析してさまざまな指摘を行い、「魔界」の意義を論者の視点から論じており、川端の魔界研究史の中で意義深いものとなっている。申請者の留学期間はけっして長くないが、日本語をマスターして謙虚に多くのものを吸収しており、400 ページを越える本論文の文章も明快、適切であり、論理的展開も緻密である。研究者として活動していく力量を充分備えており、日本と中国においての活発な活動が期待される。

以上のことにより、審査委員は全員一致で、本論文が「博士（学術)」の学位を受けるのに値するものであることを認める。

審査委員

主任審査員	早稲田大学社会科学総合学術院教授		内藤　明
審査員	早稲田大学社会科学総合学術院教授	博士（法学）京都大学	島　善高
審査員	早稲田大学社会科学総合学術院教授	博士（文学）早稲田大学	笹原　宏之
審査員	早稲田大学教育・総合科学学術院教授		千葉　俊二